

# 原爆文学と日本ペンクラブの「ヒューマニズム」

石川 巧

1

原爆文学は、昭和二十年九月十九日に GHQ / SCAP が指令したプレスコードの重圧のなかで胎動する。人類史上はじめての核兵器使用という事実に全世界が注目し、多くの人々がそこに起つた出来事の真相、および、被爆者たちの惨状がメディアを通して発信されることに期待していたにもかかわらず、その最も生々しい証言はプレスコードによって遮られ、検閲や削除を余儀なくされた。

昭和二十一年三月に広島の中国文化連盟が『原子爆弾特輯』と銘打つて機関紙『中国文化』を創刊したとき、大久保沢子『三日間』、山本康夫『幻』といった原爆体験記が検閲にかかり、「悲惨を強調してはならぬ」という理由で部分削除を命じられた例、被爆した年の秋に書かれていた原民喜の『夏の花』や大田洋子の『屍の街』が GHQ / SCAP の意向に従つて発表を見送った例<sup>1</sup>、検閲を恐れた広島の歌人・正田篠枝が原爆歌集『ざんげ』が私家版として秘密出版（同二十二年十二月・一五〇部）するしかなかつた例、そして、

永井隆の作品としては最後まで出版が許されていなかつた『長崎の鐘』が、それに先立つて出版されていた吉田健一訳の英語版の反響にともなつて、『マニラの悲劇』【原題は『マニラにおける日本の残虐行為』】という GHQ 諸報提携のドキュメント、写真と抱き合わせて全体として一冊にまとめることでやつと許可が下りた例などが端的に物語つているように、原爆文学の発火点には、いかに書くかという命題とともに、いかに検閲を逃れるかという命題が存在していた。なかには小倉豊文の手記である『広島原子爆弾の手記 絶後の記録』（昭和二十三年十一月・中央社）のよう、「GHQ の検閲が瑣末な修正のみで、比較的早くパスした」ケースもあつたらしいが、それは筆者が「アメリカの原爆投下について非難攻撃的な記述をしていない」から許可されたに過ぎず、ルボルタージュに対する統制が文学よりも緩かつたわけではない。敗戦直後の日本では、日本人が自分たちの身に起つた出来事について自由に書くことも知ることがも許されていなかつたのである。

こうしたなか、いち早く原爆被災地を取材し、世界に向けて情報発信したのがジョン・ハーシーである。昭和二十一年五月に雑誌『ニューヨーカー』および『ライフ』の特派員として広島に派遣されたジョン・ハーシーは、同年八月三十一日付け『ニューヨーカー』の全巻を埋めて発表された『ヒロシマ』および同年十二月にノーツ社から刊行された『ヒロシマ』によつてアメリカ中にセンセーションを巻き起こす。また、同書はプレスコード下の日本でも翻訳（右川欣一／谷本清共訳、昭和二十四年四月・法政大学出版会）され、大きな反響を呼んでいる。同書の「あとがき」を担当した谷本清が、

<sup>1</sup> ニューヨークのニュース・スタンドは一日にして三十萬部を売り

盡し、各地の大新聞は連日『ヒロシマ』を連載した。（中略）ハーシー氏からも、「もう、この国における百以上の新聞に連載され更に劇化された『ヒロシマ』は連日全国の放送局から放送されつつある」と報せて来た。アメリカ国内のみならず、『ヒロシマ』はカナダに、英國に、南米諸国に、そして歐州各国に英語でのみならず十数力國語に翻訳されて宣伝せられるに至つた」と記したことからもわかるように、このレポートは当事者である日本やアメリカはもとより、全世界に衝撃を与えることになる。すでにルポルタージュ作家として活躍し、一九四五年度のピュリツツア文学賞などを受賞していたジョン・ハーシーは、その後、昭和二十四年六月三十日付「ウエストポート・タウン・クリヤー」紙に広島十万人平和請願運動を発表するとともに、自らの印税を辞退して広島の慈善事業や平和運動の資金とする。また、ニューヨークに広島平和センターを結成し、ノーマン・カズンズ（広島平和センター建設準備委員長）、パール・バッック（作家）、スタンレー・ハイ（元大統領顧問）らとともに、原爆孤児の精神養子や広島復興などに関する協議を立ち上げる。

当時、日本ペンクラブの会長をしていた川端康成を代表として、

豊島與志雄幹事長、小松清幹事、水島治男書記長の四名が、広島市の招待で原爆被災四年後の広島を訪問し、「原爆と文学」、「文學者と平和」の問題について議論するのは、そうしたジョン・ハーシーの言動に刺激されることである。豊島與志雄が「ヒロシマの声」（『世界』昭和二十五年三月・岩波書店）のなかで、「戦争の脅威に対抗して、世界の良識ある人々の間には、周知の如く、平和擁護の声が起つてゐる。その中にあつて、ジョン・ハーシー氏の率直な記録『ヒロシマ』は、アメリカの良心に衝撃を与へた。オークラ

ンドには世界平和デー委員会が設けられ、次でニューヨークには、広島を世界のピース・センターにせんとの委員会が設けられた。ノーマ・モア・ヒロシマズの声は世界に拡がりつつある。広島市庁には世界各地から同情のある書信が到来しつつある。この世界の与論に応じて否むしろそれに先んじて、ヒロシマは自らを平和都市となり、世界平和運動の根拠地たらんと自ら期してゐる。（中略）ヒロシマの声に耳を傾け、その声を自分自身のものとしなければならない。ヒロシマは日本の中に在るのだ」と説いたように、そして、小松清が「一つの回想と一つの希望」（『世界』昭和二十五年七月）において、『広島の会』に行つた作家たちは、みな『ヒロシマ』をよんでいる。原爆の地広島にのこつてゐる『大きな傷口』をみただけではなく、この『大きな傷口』をもつてアメリカにかえり『ヒロシマ』をかいたハーシーのヒューマニズムに深く感銘するところがあつたろうと思われる。そして、ハーシーやノーマン・カズンやパール・バッックが国際的に展開している『ノーマ・モア・ヒロシマズ』の運動が如何なる精神から湧き出たものであるか、如何なる意味で新しい戦争にたいする『良心の拒絶者』の誓いであるかを汲みとつたことだろう、と私は信じている。ここにも共通した平和への意思によつて、国境を超えて、恩怨の彼方に結ばれた理解と友情の生長がみてとられるのである」と記したように、日本の作家たちはアメリカからの逆輸入として「ヒロシマ」を追体験するのである。先述した豊島與志雄の言葉が図らずも物語つてゐるように、それは抽象としての「ヒロシマ」を媒介として、バラバラに寸断されてしまった「日本」を取り戻す試み、すなわち、文学を通して他者の声を自分自身のものにするという記憶の共同化という作業を行つていこうとす

る試みだつた。

ところで、ハーシーの『ヒロシマ』は原子爆弾が広島上空に一閃した瞬間を共有する六人の人物（東洋製罐工場の人事課院佐々木とし子、病院を営む藤井正和博士、仕立屋の後家である中村初代、ジエス・イット派のドイツ人司祭ウイルヘルム・クラインゾルゲ神父、赤十字病院の若き外科医である佐々木輝文、広島メソジスト教会牧師の谷本清）から体験談をリポートしたものだが、それを聞き書きのような間接話法ではなく、語り手が人物を動かし、造形していくようなどキュメンタリ―小説の方法で表現している。冒頭に近い場面での「さまざまな瑣細な偶然や決心のおかげで助かったのだと、めいめいが考えてるのだ。今でこそ彼らは知つて、生き延びてきたあの場面では、幾たびか生死の境をくぐり、夢想だもしなかつた程の大量の『死』を目のあたりに見たことを。だが、その瞬間は、彼等は何の見当もつかなかつた」という記述からもわかるように、その背景にあるのは、彼らが「目のあたりに見たこと」という共時的光景と、それぞれが「生死の境」を生き延び、「あの場面」で起つた出来事の意味を知るまでの通時の光景を交差させることで、個別体験を普遍化しようとする試みである。また、随所にハーシーが調査した科学的情報やデータが組み込まれることで、「広島」が「ヒロシマ」に転化して過程が鮮やかに切り取られている。本文の最後で少年の綴方を紹介する場面を、「広島原爆の日に生きぬいた子供たちの心の底に、どんな恐怖が植え込まれたか、それは解らない。外から見たところ、惨害數ヵ月後の子供達の思い出は、血を沸かす冒險の思い出であつた。爆撃当時十一歳だった中村敏男は、じきに、自分の体験を気軽に、いや、大はしゃぎで話すようにさえなつた」

と描写するなど、ハーシーは、広島の惨状や苦しみを被害者の側に立つて告発するのではなく、そうした惨状のなかで人々がどのように行動し、どのようなことを考えたのか、どんな事実が起つたのかという点にのみ視点を限定し、自分の目でとらえることができる領域、人々の心の底に「どんな恐怖が植え込まれたか」については「解らない」と明記する。同書の翻訳者で登場人物のひとりでもある谷本清の証言（日本語版「あとがき」）によれば、ハーシーはインタビューの冒頭で、「今まで原子爆弾の科学的被害調査は種々行なわれたが、私はそれと違つて人道主義の立場からその被害調査をしたいのだ」と語つたそうだが、彼にとっての「人道主義」とは、まさに「ヒロシマ」を記憶されるべき過去、語られるべき体験として了解するのではなく、いまだ途上にある問題として保留と継続の意思を示し続けることだつたのである。

だが、日本ベンクラブには、ハーシーのめざす人道主義とは別に、もうひとつ、文学者の戦争責任をめぐつて混乱した組織を建て直し、諸外国の運動と足並みをそろえていくかとていう問題が横たわつていた。『日本ベンクラブ五十年史』（昭和六十二年十一月・日本ベンクラブ）が明らかにしているように、戦後における同会再建のきっかけは、敗戦からわずか一ヶ月後の昭和二十年九月に、旧「改造」編集長だった水島男が電通社長の上田碩三から「世界文化」という雑誌の発行を依頼され、併行して「世界文化研究会」という学者や文化人による懇話会を開催したことにはじまる。安倍能成、鈴木文史朗、田中耕太郎、向坂逸郎、土屋喬雄、林健太郎らを集めたこの懇話会のなかで、当時、読売新聞論説委員だった松尾那之助が「ベンクラブを再建すればユネスコに仲間入りできるかもしれ

ない」と発言し、そうした内容を書き添えた日本ペンクラブ再建趣意書が配布されることになったのである。その後、川端康成、小牧近江、小松清、立野信行之、新田潤などが加わって「世界文化」編集室で具体的な相談がなされ、昭和二十二年二月十二日の再建大会を開催することになる。要するに、ペンクラブの再建は、作家たちが内発的に必要を訴えたものではなく、ユネスコへの加入、あるいは「世界文化」への貢献というスローガンのもとで立ち上げられたものなのである。

戦時下において、日本文学報国会の活動などに積極的に関わったわけではないが、少なくとも、不感症的なナショナリズムしか持てないまま言論の自由を放棄してしまったことに贖罪を感じ、疲弊しきっていた作家たちは、こうして、「ヒロシマ」「ナガサキ」の問題をペンクラブの取り組むべき課題として、ひとつずつ禊ぎを行つとともに、自分たちの存在意義を確認し、世界に向けて発信すべきメッセージを獲得する。岡真理の言葉をかりれば、彼らは「言葉では語ることのできない体験、〈出来事〉を、物語として語るという時代の要請」（『思考のフロンティア 記憶／物語』平成十二年二月・岩波書店）に応えつつ、それを足がかりに文学の戦後復興をめざそうとしたのである。

は、戦後、同地に在住して地方文化の育成や原爆反対運動に尽力していた田辺耕一郎会員の案内で被爆地周辺をめぐり、座談会の場では〈原爆と文学〉、〈文学者と平和〉などのテーマで議論が重ねられた。当時の「中国新聞」に掲載された談話には、「広島のことは、来てみなければ決して実体はえられない。見ないで想像したぐらいではとても思いもよらない」（川端）、「広島にもつと早くればよかつた。平和運動とヒロシマのつながりをみんなで考えあいたい」（豊島）、「広島にたいする連想はきてみて大変化をきたした。広島については、原爆地にたびたびしたり、ここで考えたりしなければ、真実のものは書けないだろう。広島を日本全国の青少年にぜひみせたい」（小松）といった言葉が並び、現場を見ること、現場で考えることの大切さが繰り返し説かかれている。この頃、出版界では大田洋子や原原喜をはじめとする被爆体験者による、すぐれた原爆文学が続々と発表され、石田雅子「雅子艱れず——長崎原子弹爆弾記」（昭和二十四年八月・表現社）、永井隆編『原爆雲の下に生きて——長崎の子供らの手記』（同年八月・講談社）、吉川清『平和のともしび——原爆第一号患者の手記』（同年九月・京都印書館）といった被爆者の手記も広汎な読者を獲得していくが、広島市が日本ペンクラブの面々を招待したのも、文学を通して広島の現況を伝えてもらうことを期待してのことだろう。

帰京後の十二月一日、代表団は日本ペンクラブの例会で現地報告を行い、豊島與志雄が「ヒロシマの体験はあまりにも深刻であり、あまりに生々しい。その体験の息吹きとでもいえるものが、今でも広島に漂つてゐる。見ると聞くとでは大変な違いだ」（『日本ペンクラブ五十年史』昭和六十二年十一月・日本ペンクラブ）と訴える。日本ペンクラブの代表が最初に広島を訪れたのは昭和二十四年十一月二十六日のことである。川端康成を代表とする先述の四名

また報告を聞いた青野季吉からは「来春を期して広島に行こうではないか」という緊急動議が提出され、広島での例会開催が「満場一致」で可決される。同年十二月九日の「中国新聞」では、そのニュースが「日本ベン・クラブ会長川端康成氏ほか豊島与志雄、小松清、水島治男氏一行は世界平和センターとしての広島の実情調査、資料収集のため先月下旬来広、幾多の成果をおさめて帰京したが、1日国会図書館で開かれた同クラブ月例集会は広島の現状とその歴史的使命が中心論題となり、とくに臨席した岩本衆議院副議長からこの度の一行訪広についての謝辞が寄せられ海外からの反響に関する報告なども加わり熱心な検討が行われたが席上青野季吉副議長からこの度の一行訪広についての謝辞が寄せられ海外からの実態を徹底的に理解させる第一歩として来年上半期中に同クラブ月例集会を広島で開く緊急動議が出され満場一致可決された。／＼この快報を携えて帰報した同クラブ会員田辺耕一郎氏が8日語るところによると明春エジンバラ開催について国際ベン・クラブ一九五一年度大会を広島へ誘致する案も目下日本ベン・クラブで慎重検討中である」と伝えられている。

こうして、翌年四月十四日、日本ベン・クラブ代表団（川端康成、青野季吉、阿部知二、会田軍太夫、石川達三、小牧近江、小松清、芹沢光治良、田辺耕一郎、寺崎浩、寺田竹雄、新田潤、原民喜、保高徳蔵、真杉静枝、丸岡明、水島治男、湯浅克衛、米川正夫）に文藝春秋新社の徳田雅彦、岩波書店の海老原光義らの出版編集者、各マスコミ関係者を加えた一行が「広島の会」出席のため広島入りする。午後二時四十七分着の列車で広島入りした一行は、駅長室で小休憩ののち、約三時間にわたって広島赤十字病院、市内原爆の遺跡

などを歴訪。その後、高須町前田別荘に旅装を解く。また、翌日は午前十時から爆心地に近い基町の瓦斯ビルホールにおいて、広島ベン・クラブ、広島ユネスコ協力会などの共同開催というかたちでベン・クラブ会長の阿部余四男の歓迎挨拶に続いて、作家側を代表して青野季吉が「……世界が注目している広島をアメリカが注目する以前に日本ベン・クラブが注目すべきであった。いろいろな事情で今までそれができなかつたのは遺憾であるが、今日われわれはやつて来たわれわれは原爆都市広島を知りたい、広島の現実にふれることによつてそれが必ず作家の仕事のなかに生き、そしてその仕事が世界の平和運動のために役立つことを信じて疑わない。ベン・クラブは平和のために存在している、全世界に作品を通じて広島を訴えることが出来れば意義はまことに大きい」と応えた。その後、ベン・クラブの例会にならつて作家の自己紹介が行われ、広島ベン・クラブ会長が原爆当時の思い出を語り、最後に水島治男書記長から、「一九五〇年四月十五日、日本ベン・クラブは世界における最初の原爆犠牲の地、広島において特別のミーティングをひらき、平和都市として新しき途をたどる広島の復興を心からよろこぶとともに、平和にたいする熱情と決意を新たにし、世界ベン・クラブの同志との交友精神と緊密なる協力により、かつ広島ベン・クラブに所属する文化人諸氏との同調によつて、世界平和擁護のためベン・マンとして純粹誠実たる努力を果たさんことをわれわれ自らに誓うとともに、ここに内外に宣言するものであります。」（日本ベン・クラブ「広島の会」という宣言が発表されて閉幕した。この宣言に対しては、地元広島の日本銀行支店長がわざわざ立ち上がりて「作家は原爆の恐怖を読者の

胸に強く焼きつけるような小説を積極的に書いてほしい」という要望が出される一幕もあったという。

同日、午後二時からは、中央公民館で「世界平和と文化講演会」が開かれた。窓外にまで聴衆があるが、川端康成の「宣言」（前述のもの）朗読と挨拶に続き、芹沢光治良「広島に来て」、米川正夫「トルストイとドストエフスキイ」、石川達三「平和と自由」、保高徳蔵「芥川賞の人びと」、新田潤「文芸私観」、寺崎浩「新文学の方向」、寺田竹雄「アメリカ漫談」、小牧近江「広島から平和の樹を」、立野信之「平和擁護の運動」、会田軍太夫「科学と文化」、真杉静枝「平和と女性」、石川達三「書齋の憂うつ」、原民喜「原爆経験以後」、丸岡明「文壇新人展望」、阿部知二「戦争と平和」、湯浅克衛「記録文学その他」、田辺耕一郎「広島と文学」、小松清「ベンクラブとユネスコ」、青野季吉「平和について」など、日本ベンクラブの一による講演がひとり約五分の持ち時間で次々に行われ、予定より二時間も超過して五時過ぎに閉会した。その後、一行は二日目の宿泊となる宮島に向かった（以上の内容は、昭和二十五年四月十五日～十七日にかけての「中国新聞」の記事をまとめたもの）。

四月十六日、一行は宮島で解散し、三班に分かれて、第一班は長崎、第二班は三原・因島、第三班は福山・尾道へと、それぞれ向かった。特に長崎には川端康成、青野季吉らのほか、東京から直行した立野信之、林芙美子が訪れ、原爆症で死の直前だった永井隆、原爆体験記「雅子斃れず」を書いた十九歳の石田雅子を見舞うとともに、原爆によって千八百人の児童中千三百人が被災死した山里小学校の数少ない生き残り児童たちと対面した。山里小学校では『原子雲の下に生きて』という児童たちの手記を贈られ、

が開かれた。窓外にまで聴衆があるが、川端康成の「宣言」（前述のもの）朗読と挨拶に続き、芹沢光治良「広島に来て」、米川正夫「トルストイとドストエフスキイ」、石川達三「平和と自由」、保高徳蔵「芥川賞の人びと」、新田潤「文芸私観」、寺崎浩「新文学の方向」、寺田竹雄「アメリカ漫談」、小牧近江「広島から平和の樹を」、立野信之「平和擁護の運動」、会田軍太夫「科学と文化」、真杉静枝「平和と女性」、石川達三「書齋の憂うつ」、原民喜「原爆経験以後」、丸岡明「文壇新人展望」、阿部知二「戦争と平和」、湯浅克衛「記録文学その他」、田辺耕一郎「広島と文学」、小松清「ベンクラブとユネスコ」、青野季吉「平和について」など、日本ベンクラブの一による講演がひとり約五分の持ち時間で次々に行われ、予定より二時間も超過して五時過ぎに閉会した。その後、一行は二日目の宿泊となる宮島に向かった（以上の内容は、昭和二十五年四月十五日～十七日にかけての「中国新聞」の記事をまとめたもの）。

こうして作家の目でみた広島・長崎を文学として表現することを誓い合ったメンバーは、帰京後、新聞や雑誌にコメントを発表する。たとえば四月二十日付の「朝日新聞」には、青野季吉の「地に青草もゆ 広島にて」と林芙美子の「空にはタコ 長崎にて」が掲載されている。二人に共通するのは、完膚なきまでに破壊された建築物に衝撃を受けつつも、広島・長崎の「復興」ぶりが予想以上であったことを賞賛し、青々と繁る草木や昔ながらの風物に再生を予感しよとする視線である。また、「こゝが世界最初の原爆の地だ」という観念の眼はかえつてさえるばかりであった」という青野季吉の言葉、あるいは、「長崎の街は案外昔通りの家も残り、原爆の洗礼を受けた當時を知らない私には意外にも昔ながらの長崎のよ

川端康成がこれを世界中のベンクラブへ送り、世界の文学者に広島や長崎がどれほどひどい目に遭ったか知らせたい、と挨拶した。同十七日の「長崎日日新聞」には、「ベンを通じて全世界に原爆の悲惨を再認識させ世界平和の素材を長崎に求めて十七日午後七時長崎駅着急行で来嶠した日本ベンクラブ会長川端康成、同副会長文芸評論家青野季吉、ロシア文学第一人者米川正夫、寺崎浩、立野信之、湯浅克衛の名、■作家と広島文理科大学大学助教授で原爆体験記『広島原子弹爆弾の手記』著者小倉豊文、キング編集長井田三郎、文芸春秋編集長徳田雅彦、ベンクラブ書記長水島治男氏ら一行は十八日午前十時、観光バスを利用して長崎国際文化協会員や長崎ベンクラブ会員などの案内で午前のひとときを市内名所旧跡見学へと走らせた。」（■は新聞の活字摩滅により判読不能）という紹介記事が掲載されている。

彼らは現地を見たことで、むしろ記憶や観念としての広島・長崎が前景化してきたと語っている。わずか数日間の滞在で「原爆の恐怖」を理解したつもりになつてはいけないという抑制が働いているとはいえ、その記述はあまりにも物見遊山的であり、俯瞰的に捉えられた自己イメージだけがひとり歩きしている。そこでは、作家＝表現者という場所が無条件で保証され、原爆を体験していない人間が原爆について語ること、それを素材に文章を書くことの問題がすっぽり抜け落ちているのである。昭和二十五年八月十三日付の「週刊朝日」には、「おばあちゃん」という記事があり、ペンクラブの大会で広島を訪れた「ある女流作家」が、「余りに整いすぎていて、もつとザックバランにしなければ」と漏らしたというエピソードが紹介されているが、「復興」ぶりに驚嘆の声をあげる彼らの言葉には、どこか廃墟願望のようなものさえ漂っている。そこには、広島・長崎を訪れた作家たちが、その傷跡のなまなましさに直面すればするほど、どこか滲刺とした生氣をみなぎらせ、いまこそ我々の出番とばかりにテンションを高めていく様子が鮮明に映しだされている。

また、そうした「復興」論とは別に、作家たちがさかんに口にしたものうひとつの言説は、原爆の恐ろしさを世界に発信し、平和への意志を示そう……という、いわゆる作家の「役割」論である。「原爆の恐ろしさを、素朴に、ありのままに、世界の人々に向つて、倦むことなしに語つたならば、いさきかでも世界の人々に想像力と理性があるならば、戦争が『悪』であるばかりでなく『不可能』だということを、了解しないことはないであろう。それが、広島の人、日本人の人の義務である」（「奈落での希望」「世界」昭和二十五年七月）と述べた阿部知二。「昭和二十五年の四月十五日に、私達文

学者が広島でペンクラブ広島の会をひらいた。／原爆地たる広島を見舞い、つぶさにそのあとを観察し、広島の現実をこの眼で見ることで、それが必ず作家の仕事のなかに生かされて、そのために世界平和運動に役立つであろうと考えられたからだ」（『幸福への招待』昭和二十八年六月・要書房）と述べた芹沢光治良などはその典型である。そこでは、「広島の人」がいつのまにか「日本人」に横滑りし、被爆者の問題が被爆国の問題に書き換えられている。自分たちを「素朴に、ありのままに」語れる立場と規定することで、まるで「世界平和」に貢献する資格を得たかのように錯覚している。しかも、こうしたプロ作家たちの言説は、しばしば「……その当日の地獄図は、二三の作品に書かれてもいるし、手記も二三印刷になつているが、その悲惨なことは、どんな風にも書きあらわせないものか、充分表現されとはいえない。ただ生き残った人々の魂にきざみつけられているのであらうが、生き残った人々は、悲しい記憶を忘れようとしているのか、言葉少なくて、涙ぐんで、ぼくとつな言葉でその片鱗をもらすにすぎないが、目を閉じるようなことばかりだ」（芹沢光治良）といった手つきで体験者を言葉少なき者に追いやり、作家を魂の代弁者に仕立てようとする。そこには広島・長崎を世界の「ヒロシマ・ナガサキ」に昇華させる役割を自分たちが担わなければならぬという凶暴な自負さえ内在しているのである。

座談会「文化人の眼に映じた広島」（『中国新聞』昭和二十六年六月八日）における大田洋子の発言には、そうした物言いがなされることへの強い懸念が感じられる。この座談会のなかで彼女は、「去年の春は日本ベン・クラブの方があれだけ大勢いらしていろいろお書きになつたようですが、原爆のあとを御覧になつて気の毒だとか何

とか、外来者は肚の中で思ついても悪くはないと思いますが、私の場合は小説家であり、この土地の出身ですから、そのうえ婦人会でもないし、それから体験者ですから遠慮なく申しますが……」というかたちで発言をはじめる。それを聞いた丸岡明が、慌てて「日本ベンケクラブの連中がやつてきたことについてさつき大田さんが物見遊山にきたように見えたといわれるのは困る」と応じていることからもわかるように、大田洋子の切りだし方は、座談会の場に相当の緊張感を与えたと思われる。ところが、何を思ったのか丸岡明は、「皆で自費を出しあつてやつてきた」などという的外れな反論をしたあげく、「日本人全体の問題として原爆にあつた広島から平和宣言をすることが大事だと思うのです」と語り、大田洋子という被爆体験者が自らの問題として語つている苛立ちを「日本人全体の問題」として回収しようとしているのである。

この対話には、原爆を文学として表象することの困難さが重層的にあらわれている。まず、そこには現実の困難を抱えた被爆者がいる。彼らのなかには、先述した広島の日本銀行支店長のよう、「作家は原爆の恐怖を読者の胸に強く焼きつけるような小説を積極的に書いてほしい」と期待する人々もいるだろうし、被爆者として差別されることを恐れて口をつぐむ人々、ひつそりと息をひそめて記憶の風化を待つ人々もいるだろう。また、彼らはみな広島・長崎への原爆投下が人類史上における未曾有の出来事であり、自分たちが世界中の誰も体験したことのない困難を強いられているのを十分に自覚していた。彼らにとっての原爆とは、戦争の一部として「日本人全体の問題」に還元されるものではなく、きわめて局所的かつ個別的な問題だったのである。その意味で、「体験者ですから

……」と語ることで大田洋子が訴えるのは、体験者／非体験者という短絡的な区別ではなく、個々のなかにさまざまなかたちで瑕が残されている問題がなんの疑いもなく全体化され、みんなの問題へと薄められていくことだったのではないだろうか。

### 3

こうした対立または齟齬そのものを問題化していくことは、原爆を文学として表象するうえで避けることのできない手続きだつたと思われる。だが、例えば長岡弘芳が「原爆文学とナショナリズム」（原爆文学論、昭和四十八年六月・風媒社）において、「振り返れば、文学者の戦争責任問題は、外的な文学的事件としても尻切れトンボに終り、無論内的な文学営為としてはほとんど見るべき成果を残さずに通過した。現に戦前の大家は、多く戦後も大家として活躍している。阿川が原爆投下による民族的無念をついにわがものとなしえず、したがつて人民の側からするナショナリズムとは無縁に、スルスル戦前の旧懐情緒の中へ采けていつた筋道は、むしろ伝統的なものとこそいべきであるだろうから。／かつて竹内好は戦前・戦中の知識人の態度を一点から概括（血ぬられた民族主義をよけて通つた）（昭二八年「国民文学論」と表現した。その言葉を借用するなら、原爆投下を突起点とする自民族が（血ぬられた）ことの惨も無念も、また等しく歳月の風化のなかに解消しようとする、できるとする一つの典型が、阿川に集約されてあるといえよう。そしてナショナリズムと区切つてみても、そこにも認められるこうした不感症的なわが国精神風土・体質の脆弱さは、より広く辿るなら

人間に対する共感の幅の狭さとして、今もわが日本文壇に抜きがたく残されているのである」と述べたように、文学者の戦争責任問題に関してすら「文学營為」として見るべき成果を残せないまま反古にした日本の文壇は、原爆を体験していない作家が原爆を語ることの問題に關しても、まともに対峙せず、「不感症的」な態度でやり過ぎしてしまった。そして、広島・長崎を訪問する過程で、それぞれの復興ぶりをアピールし、文学を通して原爆の悲惨さを世界に向けて伝えていくことを気楽に約束してみせた日本ペンクラブのパフォーマンスは、その最たるものだった。

当時、日本ペンクラブの面々が行つた講演を聴いた山田かんは、のちに「長崎原爆と文学の系譜」（『読売新聞』昭和五十年七月三十日（八月一日））のなかで、「長崎の原爆を記録的文学として描いて欲しい」という市民の欲求は、この悲惨を世に訴えるためにも潜在していたであろうことは察せられる。昭和二十年代においては、断片以外はほとんど語られてはいなかつたのである。それは昭和二十五年四月十八日、日本ペンクラブ員として長崎へ来た川端康成の講演にもうかがえるだろう。この時、林美美子、立野信之、青野季吉、米川正夫ら十数名が長崎に来ているが、このなかで川端康成は、「平和ということ」と題し、一部要旨を次のように話している。『我々が参りましたということについて、すぐ作品に現れるとか、隨筆等に現れるということは御期待願えないのであります、とに角、原子爆弾が落ちたという都市に出ましたことは非常に感銘深いのであります』と。これを見ても市民のそのような被爆実態への、作者の目を通した正確な表現に対する期待を、作家としていち早く察したが、それがむずかしい事柄であることを知つたのではなかつたろ

うか。こうして長崎被爆は表現として知られること少なく、時代が流れていったといふことがいえよう」と回顧し、日本ペンクラブの代表だつた川端康成ですら、それがいかに「むずかしい事柄」であるかを知つていたと証言している。そして、この証言を裏付けるように、川端康成が広島・長崎の訪問を素材とした唯一の小説「天授の子」（『文学界』昭和二十五年二・三月）には、「日本ペン・クラブは国際的に承認され、外国のベン・クラブと連絡がある。それで私たちに原爆の惨禍のあとを見せ、平和都市の計画を知らせ、折があれば海外の文学者に広島を伝へほしいといふので、私たちは招かれたわけだつた。また私たちを呼ぶことによつて、広島の平和運動を強めたいとの考へもあつただらう。ペン・クラブは平和主義である。／私たちは広島で感動した。来てよかつたと言ひ合つた。海外への連絡はとにかく、一人の人間として、一人の作家として、私は鞭をあてられた。／しかし、盛り沢山の日程の上に、見るもの聞くものの刺戟が強いし、きらひな講演会や座談会が重なつて、私は少々疲れた。巣島で休んだが、こここの自然と広島の焼跡とは異様な両極端だつた」という文面が残されている。そこにあるのは、「原子爆弾の惨禍」を世界に伝えたいと考えたのは広島であつて、日本ペンクラブは「平和主義」という旗印のもとでそれに協力しただけだとでもいたげな受身の姿勢であり、「感動」はしたけれど「疲れた」という投げやりな本音の吐露である。原爆を描くことで日本の文学を世界に向けて発信しようとした日本ペンクラブのもぐるみは、こうしてかけ声だけに終り、作家たちの創作活動に見るべき成果を残さないどころか、原爆文学のあり方をめぐつて議論することすら回避したまま消滅するのである。

では、なぜ日本ペンクラブは組織として「平和主義」を謳いながら、個々のレベルにおいて原爆を文学の素材としてとりあげていく道筋を描けなかつたのか。その問題を考えるためには、まず、戦後に日本ペンクラブが再興されてからの取り組みを辿つてみる必要がある。

戦後の日本ペンクラブは、昭和二十三年五月に志賀直哉会長が辞意を表明したのち、新会長を推薦するための役員改選を行う年次総会を開催することからはじまる。丸ノ内のプレスクラブで行われた総会の席上、中島健蔵の動議で、「日本ペンクラブの会員はヒューマニズムに基づく世界の平和のために、今度こそ、再び敗退することなくめげずに働く」という宣言が採択される。そして、翌月の評議委員会で誕生した川端康成会長をはじめとする新執行部は、国際ペンクラブのベニス大会に「政治の対立は平和をも対立させると憂えられる。われわれ（日本ペンクラブ）が西と東との相互の理解と批評との未来の橋となり得るならば、幸いこれに過ぎるものはない」というメッセージを送るなどして、国際的な連携を進めしていく。そこにはみられるのは、戦後、岩波書店が創刊した雑誌「世界」などを中心に展開されていたヒューマニズム・イデオロギーそのものである。加害者／被害者の論理で捉えることをやめ、世界をひとつにつないでいくことで、戦争を人類共通の敵とみなしていくような平和主義である。例えば、昭和二十二年一月の「世界」に「ヒューマニズムの意味」を発表した田中美知太郎は、「……人間には過失もあれば、弱点もあり、墮落もある。しかしながら向上もあれば、美点もあり、成功もある。そしてこれこそ積極的に人間的なものなのである。そしてこのやうな善きものを人間に認めて、人間

を信ずることこそ、ひろく人間を愛することの基礎となるであろう」と切りだし、いわば人間愛としてのヒューマニズムを説いたうえで、人間愛を遂行するためには、いかなる場合においても人間を人間として認め、「敵のうちにさへ人間的なものを見出さうと努力する」ことが必要だと述べているが、それはある意味で、戦前のナショナリズムが想定した国家というものを人類に置き換えた高次元のナショナリズムとして機能したのである。また、ヒューマニズム・イデオロギーには、「根本において人間を信ずる心がけ」でなければならぬというお題目がある。そこで求められるのは、どれくらい信じられるかという宗教にも似た忠誠心であり、信すべき人間性とはどのようなものかという問い合わせが棚上げにされる。田中美知太郎の言葉をそのまま引けば、「およそ人間のなすことは、自分にはよそことは思はれないといふ、一個の博大な精神」によつて、ひとりひとりの人間が自分の立つている場所から見える光景が地均しされ、他人のことを「よそ」とと思うことが背徳行為とみなされるようになるのである。

同じ雑誌「世界」に掲載された論文ではあるが、清水幾太郎は昭和二十二年の段階ですでにその空気を察知し、ヒューマニズム賛美の思想が蔓延することに警告を発している。「ヒューマニズムの性格」（昭和二十二年二月）と題された論文のなかで、氏は、まず「戦争が終つて間もなく何処からかヒューマニズムといふ言葉が現はれて来た。何物かを約束するやうな美しい名称に魅力があるのであらうか。それは次第に人々を周囲に集め、自ら一種の空気を作り出して、今日では既に無視することを得ない力になつてゐる」と語りはじめ、それが戦中のファンズム支配に対する抗議と防衛のなかで

培われてきたものだと規定する。そしてさらに、「ヒューマニズムが戦争と荒廃との十年の後に再び吾々の間に現はれて、それに固有な曖昧を湛へながら、今日その曖昧から何を説かうとするのであらう」と問いかけ、ヒューマニズムの台頭をうながす「心理的な側面」に言及する。清水によれば、人間は保守的な行動のなかに「道徳的且つ人間的」なものを感受する性質があるという。われわれが「道徳的」と考えるものは、過去から続く習慣の体系を広汎な地盤としており、そのうえに成立しているため、「保守的行動」ははじて社会成員の体系によって承認され、弁明されるというわけである。戦前のファシズム台頭期に、どれだけ多くの日本人が「今日と相反する側」に「人間」的なものを認めていたかを皮相的に語った彼は、「相対立する社会的勢力の間に或は歴史的時代の間に一方が進み他方が退くといふ関係のある時、進む側の人間は人間を超えた勢力や時代の波に没して、正に人間として現はれる機会を持つことが困難であるが、これに反して退く側の人間は歴史の波に残されるままに実に人間としての輪郭を示と指摘する。また、それを踏まえながら敗戦後の日本に蔓延するヒューマニズムにも言及し、一方で「間を中心的地位に立たしめる」思想として評価しつつも、その一方では、人間を現在の自己<sup>11</sup>に与えられた自己のままに尊重し、自己の解体と超越を回避しようとする点においてきわめて保守的な態度だとする。道徳的の感情と保守的な行動が密約を交わすようになれば、その臭味に辟易した知識人が「彼等だけの人工的な問題と空氣」のなかに生きるようになり、結果的に「日本の諸問題は彼等の智慧とエネルギーを欠いたまま解かれて行くことになる」。それが彼の基本認識である。

戦後の日本パンクラブが、その再興を果たすために掲げたヒューマニズムのスローガンは、恐らく、こうした戦後の風潮と呼応したものである。清水は論考の結語として、「人間の自由、自発性、自主性は実際の経験と闘争から離れて、即ち手を汚さずに、学習のための努力を通して、与へられた自己を踏み越えた地点に初めて獲得せられるべきものである。そのヒューマニズムが戦争と荒廃との十年の後に再び吾々の間に現はれて、それに固有な曖昧を湛へながら、今日その曖昧の蔭から何を説かうとするのであらう」と問い合わせているが、それは、広島・長崎を訪れたという事実だけをよりどころに、あたかも自分たちに原爆を語ることの資格が与えられたかのように興奮し、なぜ原爆は日本の戦争経験のなかで特殊な場所を占めているのかという「現実の問題」を探ろうともしなかつた日本ペンクラブの面々にこそ、届けられるべき言説だったのではないだろうか。

さきに引用した「天授の子」において、川端康成は、「広島で私は強いショックを受けた。私は広島で起死回生の思ひをしたと言つても、ひそかに自分一人には誇張ではなかつたかもしれない。／私は、この思ひをよろこんだばかりではなかつた。自らおどろきもし、自ら恥ぢもし、自ら疑ひもした。自分の生きやうがあるひは仕事の奇怪さをかへりみずにはゐられなかつた。私は広島のショックを表に出すのがためらはれた。人類の惨禍が私を鼓舞したのだ。二十萬人の死が私の生の思ひを新にしたのだ。／しかし宗教家たちも自分の生のつたなき貧しさに堪へられない思ひで、人々のかなしさを見た時に発心したのであらうと、私はひひわけのやうに考へもし

た。文学もおのれや人のかなしみを食つて生きてゐるやうなものだ」と記した。また、「たとへばペン・クラブのベニス大会の宣言のやうな理想と希望とを、現實に照して懷疑を持ち矛盾を知り逡巡を感じるところがあるのは、平和を望むねがひがまだ痛切でなかつたらだ。私は広島で思つた。私などの平和への愛が現實の政治でなくともよい。私ひとりが生きるための心の糧として平和を念じてゐるだけでもよい。」簡単に言つてしまへば、「私は広島の原子爆弾の悲劇が書きくなつたのだ。私にとつてはそれだけのことだ。實際に書いても書かなくとも、ただ書きたくなつただけで、私は生きる思ひをしたのだつた」とも記している。同時代の文脈のなかで、この文章が何らかの積極的な意味をもつてゐたとは思えない。脆弱でありながら、どこか開き直りが漂うこの文章に、読者のシンパシーが得られたとも思えない。だが、少なくとも、川端が明確な意思をもつて原爆をヒューマニズムに接続させることを忌避していることだけは確かである。また、日本や日本人なるものを想定して、道徳的感情との間に密約を交わすようなおもねつた態度にも決定的な距離をとつてゐる。その意味で、日本ペンクラブの代表として広島・長崎を訪れ、原爆文学への期待をひしひしと感じていたはずの川端が選んだのは、「私」という存在をヒューマニズムの論理から切り離し、文字通り「人のかなしみを食つて生きてゐる」者として認識することと引き換えに、文学者としての自分にそれ以上の期待が寄せられることを完全に拒むことだった。

日本ペンクラブが広島・長崎を訪問してから、ほぼ五年後の昭和三十年。「原爆と文学」（『文学』八月）を書いた阿部知二は、原爆文学をめぐるある種の膠着状況に対し、「読む側」にも「作る

側」にも「一種の「もどかしさ」に似たものがあると述べ、そのもどかしさと闘い続ける作家のひとりとして大田洋子をあげる。そして、「……なんと広島の、原子爆弾投下に依る死の街こそは、小説に書きにくい素材であろう。それを書くために必要な、新しい描写は表現法は、容易に一人の既成作家の中に見つからない。私は地獄というものを見たこともない……人々は誇張の言葉を見失つて、しきりに地獄図といつた。地獄といつ出来あいの、存在を認められないものの名で、そのもの凄さが表現され得るものならば、簡単であろう。先ず新しい描写の言葉を創らなくては、到底眞実は描き出せなかつた」という言葉を引き、彼女こそは、「漠たるヒューマニズムの怒りや悲しみによつては、この巨大な問題と取りくみ得ない」ことを知る作家だと述べる。文学の表現上の難易などを言い訳にするような怠慢をせず、広島・長崎に原爆が落ちたことの歴史的な意味を問い合わせ、書くことのなかに「眞実の裏づけ」を保とうとする作家だと述べる。そして、たんなる「平和」や「愛」というものには原爆がもたらすよつたかう力がないばかりか、原爆は、こうした「生命愛の声、人道の涙、または祈り」を「食いものにしながら、さらに肥大していく」とことさえあると指摘する。「そのような平和思想は、その観念性によつて、無責任なヒリーズムにまで下降してゆき、平和をのぞむ善意は、いつのまにかその裏はらのもの、つまり人間への絶望、人間への惡意にまで変質することになるおそれをもつ。（中略）」この絶望と努力放棄とは、一転して豚のよなな俗物的現実主義になつてくる。それはどういうものか、かんたんにいえば、長いものに巻かれる、ということである」。

阿部知二の言説は、観念としてのヒューマニズムのなかで育まれ

た平和主義や戦争への憎しみが、現実的功利主義に対していくに無防備であるかを考えさせるだけでなく、それがいかに現実的功利主義の「友人」になりやすいかを教えていた。広島・長崎の地で手に入れた感傷と高揚をモチーフとし、日本の問題、世界の問題へと拡張することで戦後文学の復興をめざそうとした日本ペンクラブの働きかけは、こうして大田洋子や阿部知二を典型とする、「新しい描寫の言葉を創らなければ、到底眞実は描きだせない」と主張する人々の批評によって相対化されていく。そしてこれを境に、原爆文学に対しては、俗流のヒューマニズムで語ることそれ自体が厚顔無恥な行為であるといつ認識が定着することになる。

## 注

1 「夏の花」は、最初に原稿を送った「近代文学」がプレスコードを意識して掲載を拒否したため、作者が原文を相当削つて「三田文学」（昭和二十二年六月）に発表。「屍の街」も昭和二十年十一月頃には書かれ「中央公論」編集部に届けられていたが、こちらも情勢が許さないということで掲載が見送られていた。同二十三年十一月、かなりの部分を削除したうえで同誌に掲載されたが、作者自身はそれに納得がいかず、昭和二十五年五月に刊行された作品集『屍の街』（冬芽書房）を完本とした。

2 同書の「はしがき」には、「……八月六日の広島の現実こそ、この宣言「広島への原爆投下から十六時間後にアメリカのトルーマ

ン大統領が世界に向けて放送した宣言——筆者注——にもあるように、『日本国民を完全破壊からまぬがれしめるため』に、七月二十六日ポツダムの最後通牒を、日本の戦争指導者が『黙殺』した直接の結果だつたのである。人類は、特に日本国民は、この事実を忘れてはならない」とあり、原爆使用の当事者であるアメリカに対して何らかの責任を問うことを求めない、というスタンスが徹底している。また同書は、のちに『広島原爆の手記』『亡き妻への手紙』（昭和四十五年八月・八雲井書院）、『絶後の記録』『広島原子爆弾の手記』（昭和四十六年七月・太平出版）と次々に改訂出版されるが、昭和五十七年六月に刊行された中公文庫版「あとがき」には、「本書の読者は、私がアメリカの原爆投下について非難攻撃的な記述をしていないことに気がつかれたことであろう。これは本書の原稿から GHQ の検閲によって削除されたのではない。はじめから私の原稿——誰にも見せることを予期しなかつた手記の『亡き妻への手紙』——にも書いてなかつたのである。私は、アメリカをして原爆を使わせるに至つたのは、外ならぬ當時の天皇をロボットにして国民を奴隸的に駆使していた、大日本帝国の支配階級であり、戦争指導者であると信じていた。（中略）敗戦以後のこうした本書の記述は、まことに『喧嘩過ぎての棒ちぎれ』であるが、GHQ の検閲が瑣末な点の修正のみで、比較的早くパスしたのは、恐らく私のそうした執筆姿勢のためではなかつたかと思う」と記されている。